様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2008
課題番号：19730396
研究課題名　“格差社会”における“自己責任論”と社会集団内の逸脱者排除現象の関連性の検討
研究課題名（英文）The relation between the principle of self-responsibility and the rejection of deviants from their social groups in the stratified society.

研究代表者
大石　千歳（OISHI　CHITOSE）
東京女子体育短期大学・児童教育学科・准教授
研究者番号：40352728

研究成果の概要：現在の日本社会では，雇用情勢や人々の生活状況は急激に悪化している．格差拡大や新自由主義の台頭などの背景から，様々な立場の人々がお互いに自己責任論を振りかざし，人心が殺伐としつつある．この現状を心理学の立場から検討する目的で，大学生の就職活動を題材にした調査研究や，市場調査会社を通じた Web 調査（２回）で，男女正規・非正規雇用者のイメージと職業選択の原因・責任帰属，およびその影響要因を調査した．

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	0	900,000
2008 年度	2,400,000	720,000	3,120,000
年度			
年度			
年度			
総　計	3,300,000	720,000	4,020,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：　心理学・社会心理学
キーワード：　(1) 社会系心理学　(2) 教育系心理学　(3) 格差社会　(4) 自己責任　(5) Web 調査　(6) 排除　(7) 雇用情勢　(8) 社会集団

１．研究開始当初の背景

格差社会が進行したといわれる今日，わが国では自己責任が強調されることが増えた．皆自分の生活に精一杯で，自分の権利を声高に主張したり，苦しい立場に置かれた人を“本人のせいだ”と切り捨てる傾向が強まっている．その背景には，“自分はそうなりたくないが，なってしまうかもしれない”という，生活や将来への不安があると考えられる．

雇用形態を含め，社会には様々な立場の人がいるが，お互いが立場の違いを乗り越えて相手を理解し，協調しあうことで，調和ある社会が実現する．しかし，日本の雇用情勢の歪みが，様々な立場の人々の間に絶望感を生み出し，個人間・集団間の憎悪や対立を深めるように働いているという（本田,2008 など

を参照のこと).

本田・内藤・後藤(2006)が指摘するように,若者が正規雇用の職を得るのが非常に困難な労働市場構造にも関わらず,「ニート」は,仕事を見つけようともしない,無気力で他力本願でだらしない若者とみなされている.このような“若者バッシング”ともいうべき風潮の中で,「不安定雇用層」に属する若者は,自分と「だらしなく無気力で,不心得な若者」が同様に見られることを恐れるであろう.

２．研究の目的

(1)社会的アイデンティティ理論の観点から

雇用形態（正規雇用・非正規雇用）およびジェンダー（男性・女性）を一種の社会集団（社会的カテゴリー）と考え,Tajfel(1982)の社会的アイデンティティ理論に基づいて,安定雇用層と不安定雇用層の双方がもつ,「非正規雇用者の困窮」に対する原因帰属について考える.男性にとって,雇用の問題は性役割との関連において,自己のアイデンティティの重要な規定要因となっている.今日の日本では「男性は家族を養うもの」という性役割に基づく社会通念がまだ残っている傾向がある.結婚相手を探すにも,高収入であるほうが有利であるともいわれる.そのため,収入の問題は男性にとってアイデンティティや自尊心を左右する重要な問題となる.

また女性の場合は,結婚したら外で働くよりも家事や子育てを重視するほうがよいという性役割が期待されることが,いまだに少なくない.したがって女性の場合は,本人の能力や学歴に関わりなく,職についていなかったり,非正規雇用の職についていることがある.そのため,非正規雇用者であることがアイデンティティや自尊心に及ぼす影響は,男性の場合よりも少ないと予測される.

(2)相対的剥奪理論の観点から

自分たちがよその社会集団よりも損をさせられているという思いや,そこから派生する疎外感は,相対的剥奪の一種である集団的剥奪（Collective Relative Deprivation：Tajfel, 1982）と呼ばれる.

集団的剥奪の象徴的な表れとしては,最近問題となっている,ジェンダーフリーへのバックラッシュが挙げられる.少子化や教育問題など,現代社会の諸問題の多くは,女性が家庭外で働きたがることに原因がある,と主張されることがある.また,女性の権利が認められるようになった分,男性は不当に損をさせられている,という意識が持たれることもあるようである.上野（2006）は,「ジェンダーフリー」バッシングは,階層格差の拡大する日本社会で,階層を超えて男性集団を国民主体化する巧妙な装置”としている.

外国人へのバッシングや,近年マスコミで頻繁にみられる「公務員たたき」も,これと同様の構図といえる.つまり集団的剥奪は,社会において立場の異なる人に対する寛容を阻害し,社会不安を増大させる要因と考えられる.そこで本研究では,困窮した非正規雇用者への視点に,ジェンダーや外国人への態度をはじめとする集団的剥奪が及ぼす影響を検討する.

(3)自己愛・自尊心の観点から

昨今の日本社会で何件か発生している無差別殺人事件の動機は,職業生活や社会生活に挫折し,「世の中を恨んで」「誰でもよかった」というものであった.社会を震撼とさせた事件の背景を考えるとき,社会的排除(social exclusion)という問題はきわめて重要である.

職業生活や社会生活での挫折が生み出す,社会の中で自分の居場所がない,社会から排除されている,自分が社会から軽んじられ見下されているといった感覚は,個人の自尊心やアイデンティティに著しい脅威を与える.

精神分析的な観点からは，自己愛が満たされない脅威が存在するときには，人間は攻撃的になると考えられている．Kohut（1971）によれば，人間はごく幼少期には誇大自己とよばれる全能感をもった状態であるが，次第にそれがより現実的で適応的な自己愛に変わっていくという．しかし近年では，その過程がうまくいかず，不健全に肥大した自己愛を持ち続け，様々な不適応状態を示す人々が増えているといわれる．このような肥大した自己愛は，根拠に基づいた自尊心を伴わず，自己を不安定な状態にさせるという．

肥大した自己愛が満たされないと，怒りや絶望感が発生し，それが攻撃性や非行・犯罪につながるという指摘がある（影山，1991）．肥大した自己愛と，それを傷つけられた憤怒から，落ち度のない他人を殺傷するという事件が後をたたない今日，肥大した自己愛が崩れ去るきっかけの一つとして，雇用問題がもたらす影響を検討したい．

３．研究の方法

(1)2008 年１月実施の男女大学生対象の調査

東京の国立大学の男女大学生 117 名を対象に，以下の内容による調査を行った．

①. 文章記述による評定対象人物（現在（2008 年）25 歳の A 子さん）の提示．

・就職活動にはそれほど有利でない大学を卒業．４年生の 10 月まで内定をとれず，就職活動をやめる．特にやりたいこともなく，教育実習にも行ったが教師は目指さず．部活動は途中でやめ，授業もさほど頑張らず． X 社の一次面接で，卒論について聞かれて困ったが，その後 X 社に入りたくなり，準備不足を後悔．３次面接で不合格となり，落ち込んだ．

＊A 子さん自身によるの不合格の原因帰属：「女性だから（差別条件）」「自分の責任（自己責任条件）」の２条件を設け，A 子さんへの評価の違いを検討した．

②．A 子さんに関する自由記述と各種評定

・A 子さん不合格の原因帰属（自由記述）

・A 子さん人物評価（自由記述）

・A 子さんの人物評価を尋ねる 27 項目（トラブルメーカー度，自己認識の正確さ，好意度などを含む内容，５件法）

・A 子さん不合格の原因帰属を尋ねる 14 項目（自己責任（能力不足・努力不足）・運の悪さ・差別を含む内容，５件法）

③．自分が A 子さんと同じ体験をしたと想定し，職業に関する帰属９項目（７件法）．

④．正当世界信念 13 項目（６件法）

⑤. 現在（2008 年１月）の大学生の就職活動，自分の就職活動，若者の雇用問題に関する認識 11 項目（４件法）．

⑥．格差社会観５項目（４件法）

⑦．社会的態度（保守革新）１項目（４件法）

⑧．男女平等・女性差別・男性差別について６項目（４件法）

⑨. 不当な扱いへの抗議傾向５項目（４件法）

⑩. ローカス・オブ・コントロール３項目（４件法）

⑪．Canrtil Ladder（社会的カテゴリー間の相対的剥奪に関する意識を測定する方法）

・就職や雇用の面で，現在自分が置かれた状況に関する評定（最低：０～最高：10）

・就職や雇用の面で，現在の四年制大学の男子学生が置かれた状況に関する評定

・就職や雇用の面で，現在の四年制大学の女子学生が置かれた状況に関する評定

(2)2008 年４月実施の女子大学生対象の調査

東京の私立大学の女子大学生 270 名を対象に，大学新卒の就職活動への挫折体験を題材として，自由記述も取り入れて前年度の研究を発展させた新たな調査を行った．

(3)2009 年２月実施の M 社実施の調査

市場調査会社（M 社）を通じた Web 上での調査で，男女正規・非正規雇用者のイメージ

と職業選択に関する原因・責任帰属，およびそれらに影響を与える要因に関する調査を行った．

首都圏（東京都，神奈川県，埼玉県，千葉県）在住の20代男女1241名で，何らかの形（正規雇用・非正規雇用）で雇用されて収入を得ている人を調査対象とした．大学・大学院の学生，自営業，自由業，専業主婦，無職（失業中）の人は対象外とした．回答者は，正規雇用者男性307名，正規雇用者女性317名，非正規雇用者男性305名，非正規雇用者女性312名となった．

質問紙の内容

①．男女正規・非正規雇用者のイメージの自由記述(200字程度以内)と評定を行った．

評定項目：山本・松井・山成（1982)「自己認知の諸側面測定尺度」のうち，社交，生き方，まじめさ，経済力，学校の評判(学歴)，知性，趣味や特技　に関する22項目．

②．男女非正規雇用者に関する原因帰属（非正規雇用となった理由の推測）Weinerの内的・外的帰属に基づき，以下の柱で項目を設定した．

内的：本人の能力不足，努力不足，準備や見通しの不足．

外的：運や景気の悪さ，企業や政府の責任，社会的カテゴリー（性別・世代など)．

男性には14項目，女性には17項目を尋ねた．女性版では「女性差別のせいで本人が不利益な扱いをされた」という内容で，男性版では「女性差別是正が行き過ぎてかえって男性が不利益を被っている」という内容である．

③．「評価・疎外・参加・他律性・社会的統合・適合尺度」（辻岡・東，1986）より，疎外（現在の社会から疎外されているという意識)，適合（現在の社会に適合しているという意識）の下位尺度，計27項目．

④．性差観スケール（伊藤，1997）30項目と，雇用と性別に関する６項目（世論調査を参考にした内容２項目＋フェミニズムへのバックラッシュ的価値観４項目を実施した．

⑤．他の社会的カテゴリーに対する態度．

外国人，中高年，公務員に対する態度を，好意的２項目，非好意的２項目で４項目，全12項目で測定した．

⑥．格差社会に対する考え方，就活満足度，学歴満足度，自分の生活の将来の先行き，政治的立場について尋ねた．

⑦．職業的自尊心尺度（堀・上瀬・下村・今野・岡本，2003)．Rosenbergの自尊心尺度を，自身の職業に関する尋ね方に変更して用いた上，１項目を追加している）

⑧．フェイス項目として個人年収を尋ねた．

(4)2009年３月実施のＩ社実施の調査

市場調査会社（I社）を通じたWeb調査では，30代男性社会人を対象とし，自己愛傾向や将来への希望の持ち方，攻撃性などの個人特性と，彼らからみた外集団である女性や外国人への態度との関連，および両者と格差社会や自由競争への態度（自己責任論）の関連を調査した．

首都圏在住の30代男性1248名を調査対象とした．個人年収により３条件に分けると，低所得（年収300万円未満）410名，中所得（年収300万円以上～700万円未満)423名，高所得(年収700万円以上)415名であった．

質問紙の構成

①自己責任論に関連する変数

-1．生活に困っている非正規雇用者男性がそのような状況に置かれた原因の帰属に関する14項目（４件法）を尋ねた．帰属理論における内的帰属（能力不足，努力不足，準備不足)，外的帰属（景気の悪さ，政府の雇用政策の悪さ，運の悪さ）に関する項目に加え，他の社会的カテゴリー（女性，外国人，中高年男性）への帰属に対する項目を設けた．

-2．年金・介護・医療・教育・保育育児について，国の責任か個人の責任かを問う項目（世論調査等を参考に作成）

-3．格差社会観（オリジナル８項目：４件法）：社会における格差の原因帰属（努力，能力，運，環境，準備），格差肯定，格差否定，自由競争肯定に関する項目である．

-4．新自由主義（オリジナル10項目：４件法）：新自由主義に賛成方向の５項目，反対方向の５項目）．

②．相対的剥奪意識に関する変数

-1．性差観スケール（伊藤，1997）　計30項目（５件法）．「能力」「性格」「外観」「身体・生理」「行動様式」の５領域を含んでおり，各領域において性差はあると感じるか否かを問うものである．

-2．ジェンダー問題へのバックラッシュ傾向に関する項目（オリジナル８項目，４件法）．ジェンダー関連における男性の被害者意識（女性専用車両，ポジティブ・アクション，女性の社会進出により男性に生じる不利益，セクハラ問題，男性の権利の軽視に関する７項目，反フェミニズム的態度１項目．

-3．外国人の増加に関する項目（オリジナル12項目，４件法）．世論調査等を参考に作成した12項目であり，賛成方向６項目，反対方向６項目である．

-4．外国人のイメージに関する項目（上瀬・萩原，2003）．本研究では，日本にとってなじみの深い大国で，人的交流もさかんである国であるアメリカと中国について尋ねた．アメリカ人，中国人それぞれのイメージについて，上瀬・萩原（2003）の形容詞20項目を用い，４件法で尋ねた．

-5．外国人のイメージに関する自由記述アメリカ人と中国人それぞれのイメージについて，自由記述による回答を求めた．

③．自己概念に関する変数

-1．自己受容尺度（沢崎，1993）A:身体的自己（８項目），B:精神的自己（15項目），C:社会的自己（７項目），D:役割的自己（３項目），E:全体的自己（２項目）による計35項目につき，５件法で尋ねた．

-2．自己愛人格目録（小塩，1998）のうち，注目・賞賛欲求（10項目），優越感・有能感（10項目）の計20項目（５件法）を用いた．

-3．ベック絶望感尺度（Tanaka, et.al.,1998）．将来に対する楽観的見通しの否定に関する10項目，強い悲観的なあきらめに関する８項目，どちらにも所属しない２項目，計20項目からなる．

-4．日本版Buss-Perry攻撃性質問紙（安藤ら，1999）:短気５項目，敵意７項目，身体的攻撃７項目，言語的攻撃５項目，計24項目（５件法）．

④．フェイスシート

-1．個人年収

-2．卒業学校の入学難易度に関する自己評定．１項目，５件法および「わからない・答えたくない」により尋ねた．

４．研究成果

(1)2008年１月実施の男女大学生対象の調査および(2)2008年４月実施の女子大学生対象の調査：自由記述結果をみると，評定対象人物（A子さん）の文章記述内容に引きずられた回答結果となった．(1)の回答者では特に，A子さんに対して，「優柔不断」「努力不足」「甘えている」「だらしない」「よく考えていない」等の否定的な回答が多く，男女回答者ともに，自己責任条件よりも差別条件で，A子さんの人物像がよりネガティブなようである．数値データに関してはこの点を考慮し，さらに分析を進めている．

(3)2009年２月実施のM社実施の調査および(4)2009年３月実施のＩ社実施の調査につい

て：詳細な結果は現在分析中である.

引用文献

安藤明人・曽我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦　治・坂井明子　1999　日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙（BAQ）の作成と妥当性，信頼性の検討　心理学研究，70，384-392.

本田由紀　2008　軋む社会：教育・仕事・若者の現在　双風社

本田由紀・内藤朝雄・後藤和智　2006　「ニート」って言うな！　光文社新書

堀　洋元・上瀬由美子・下村英雄・今野裕之・岡本浩一　2003　職業的威信と職場における違反の関連（2）－尺度間の関連分析－　日本心理学会第　回大会発表論文集，

伊藤裕子　1997　高校生における性差観の形成環境と性役割選択―性差観スケール（SGC）作成の試み　教育心理学研究，45，396-404.

影山任佐　1999　「空虚な自己」の時代　日本放送出版協会.

上瀬由美子・萩原　滋　2003　ワールドカップによる外国・外国人イメージの変化　慶應義塾大学メディア・コミュニケーション研究所紀要，53，97-114.

Kohut, H 1971 The analysis of the self. New York: International University Press. （コフート，H. 水野信義・笠原　嘉（監訳）1994 自己の分析　みすず書房）

小塩真司　1998　青年の自己愛傾向と自尊感情，友人関係のあり方との関連　教育心理学研究，46，280－290.

沢崎達夫　1993　自己受容に関する研究（1－新しい自己受容測定尺度の青年期における信頼性と妥当性の検討　カウンセリング研究，26，29－37.

Tajfel, H. 1982 (Ed.) Social Identity and IntergroupRelations.Cambridge: Cambridge University Press.

Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T.. 1998 Hopelessnes in a community population: Factorial structure and psychological correlates. Journal of　Social Psychology, 138, 581-590.

辻岡美延・東　正訓　1986　社会・政治的態度の基本的三次元モデル―疎外・アノミー・適応の因子分析的研究―　関西大学社会学部紀要，18，31-64.

上野千鶴子　2006　不安なオトコたちの奇妙な連帯　双風舎編集部（編）バックラッシュ！VI（第６章）

山本真理子・松井　豊・山成由紀子　1982　認知された自己の諸側面の構造　教育心理学研究，30，64-68.

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計０件）

＊審査に合格しエントリー済であったが，健康上の理由により学会参加・発表ができなかったものとして，以下の海外学会発表予定があった（予稿集には掲載されている）

Chitose OISHI-SHIMOMURA 2008 (withdraw)
Relationship between causal attributions of rejection in job-hunting and assessments of persons seeking employment: Are those who avoid responsibility ‘black sheep’?
15th General meeting of the European Association of Experimental Social Psychology programme and abstract book, Pp.323-324
(June 14th Poster Session, Opatija, Croatia)

〔図書〕（計０件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

６．研究組織

(1)研究代表者

大石　千歳（OISHI CHITOSE）

研究者番号：40352728

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし